

編集後記

1日の食事、3回ぐらいとる必要性に迫られるため、時としておにぎりやお弁当も便利ですね。皆様は、お弁当というと何を思い浮かべられますか。

コンビニ弁当や持ち帰り専門店の弁当などでしょうか。それとも愛情弁当、キャラ弁などでしょうか。

弁当のおいしさは、そのときの空腹度もさることながら、食べるシチュエーションもとても大事ですね。行楽で子どもと一緒に食べる弁当は（味はともかく）、気持ちがりラックスしていることもあり、楽しく、思い出深かったりもしますね。自分の中でパッと思い浮かんだのは、さいたま市大宮の「鉄道博物館」で食べた、駅弁の新幹線弁当（入れ物が新幹線の形をしているだけです）が、最近の中ではそれに該当します。

ほぼほぼ自分で弁当を作ることはないですが、まれになんのきまぐれか、子どもの弁当を作ろうと思ったことがあります。その際に参考にしたのが、三才ブックスの『今日も嫌がらせ弁当』という本でした。5年ぐらい前にすこし話題になった本なのでご存知の方もいるかもしれません。キャラ弁の参考書としての役割を期待して買いましたが、この本のままコピー弁当を作ろうとすると、のりやチーズをちまちま切って、文字やらキャラクターの顔やらを作るため、まあ、よほど気持ちの余裕と時間がないと無理、ということがわかりました。奥さんの弁当の作り方を少しでもまねようとする方がよほど実用的です。

仕事中の食事は「生きるために食べる」的なものではあるものの、実際には仕事の士気にかかわります。家族が作ってくれるお手製弁当の場合は「わあー、今日は自分の好きなものばかり！テンション上がるぜ」とか「これ、作るのにかなり時間かかったらろう（嬉しい！だが、手間を思うといろいろ考えてしまう）」。

あと、弁当関連でときどき思い出すのが、小学校3年生ごろの山登りの遠足の時のことです。弁当とともに、当時（40年ぐらい前）はよく見かけた、中瓶がガラス製の持ち運びのできるまほうびんを持参していきました（まほうびんを自分で持ち歩いたのはその時が最初で最後かもしれません）。遠足の途中でバランスを崩してまほうびんを落としてしまいました。開けてみたところ、中の飲み物が、キラキラと輝いていたのをよく覚えています。子ども心に「なんとなく飲んだら危なそう」と思い、全く飲まずに帰りました。まほうびんの構造が当時よくわかっていなかったのですが、落とした時に粉々に割れた中瓶のガラスが飲み物と混ざってキラキラと光っていたのだ、と分かったのは後のことです。一口でも飲んでいたら、と思うと今でもゾッとします。

（理事 藤原 崇）